

---

# 暗闇の中の酸性雨

工藤夢夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暗闇の中の酸性雨

### 【著者】

Z7685D

### 【作者名】

工藤夢夕

### 【あらすじ】

冒頭であり、ボーアズラブであり、そして純愛物語です！

## 暁ドララブ純愛物語（前書き）

ネットに投稿するのは初めてです。少しでも多くの人に読んでほしくて思い切って投稿しました。

普通に縦書きで書いてたので、横書き表示されると読みにくい場面が多くあると思いますが、指導お願いします。

男の子同士の純愛なので、ボーイズラブが苦手な人にはオススメしません。

イメージとしては暁ドラです。

よかつたらコメントよろしく願いします。

## プロローグ【～雨の中の一人～】

雨はいつでもそうだ。僕の敵でもあり、また味方もある。

「シニタイ」って唱え始めたのはいつ頃からだつた？どんなにその言葉を繰り返してみても意味はなかつた。

「もう大丈夫だよ。」

どこからか不意に声がした。

「もう大丈夫だから。」

誰かに言つてほしかつたけど、誰も言つてくれなかつた。だから自分で自分に言つてあげるんだ。

ザー・・・という雨の音が僕の耳を刺す。

僕は必死に逃げていた。「何から逃げてるの？」「もう逃げる必要なんかないじやん。」自問自答を繰り返しても、足は走ることを辞めない。もうすでに心は「生きること」に諦めが付いたけれど、どうやら体の方はまだ諦めが付いていないらしい。暗闇の中、雨に濡れながら人間から逃げる姿は、まるで動物だな・・・と自嘲した。

「もし本当に動物だつたら、こんな辛い思いをせずに済んだのかな。

一瞬僕の頭を横切つた想いが口から出た。

【バシャン】

ついに足がもつれ、目の前の水溜りに激しく突つ込んだ。僕の体は、急に水泳でもしたくなつたのだろうか・それとも体もついに諦めてくれたのかな・・・生きることに。

僕の体は地上に打ち上げられた魚のように、バタバタともがいた。

しかし、それも次第に弱まつてく。

「もう大丈夫。」

その声はどんどん強くなつて僕を襲う。

「もう、大丈夫だよ。」

今日が雨でよかつた。雨は強く強く僕の体を痛めつけ、あらゆる感覚、感情を麻痺してくれる。もう何も考えたくないんだ。薄れゆく意識の中で僕は最後にそう思つた。

そして、水溜りに倒れたままゆつくりと目と閉じた。

・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・

「！」

不意に、拓弥は誰かに水溜りから起こされた。急に拓弥の頭の中が意識をとりもどす。ゆつくりゆつくり、目の前が広がる。そこには、一人の少年が立つていた。歳は拓弥と同じくらい。こんな豪雨の中、傘もささずにビショビショに濡れた少年の瞳は、なぜか言葉で言い表せないほど燃えていた。

「来い！」

その少年は言うと、拓弥の右腕を掴むと強引に自分に引き寄せ、そして拓弥の喉元に銀色に光る刃を押し当てた。

「少しじつとしてる。」

少年の緊迫した声に答えることもできず、拓弥はただ黙つたまま頷いた。すると今度は目の前の暗闇から数人の人影と声がした。

「そんなガキを人質にとつてどおするつもりだ。いいからさつさと例のものの在りかを教える。」

その声の主に向つて少年は叫んだ。

「くるな！これ以上近づくとこいつを殺す。こんな所で殺人事件なんか起きたら、警察は真っ先にお前らを疑うよなあ。」

「ふざけるなっ！」

人影が一斉にこちらに向つてくる。すさまじい罵声とともに。少年はその声を無視して拓弥をつれて走り出した。銀色の刃は、しっかりと首元に押し付けられている。雨に濡れた冷たい刃は、拓弥の首の血液までも冷たくひやす。

「ごめん。」

少年が小さく呟いた。。

2人は雨の暗闇を必死に走った。途中、何度も崩れそうになる拓弥の体を少年に助けられながら。

2人は古びた工場に入った。今は使われていないような・・・そんな古い工場だった。少年は拓弥を地面に座らせるど、外の様子を確認しに入口から顔を出した。

「いいよ。」

暗闇から声が聞こえて少年はとつとつに振り返った。それは、拓弥の声だった。

「もう、頑張らなくとも良いんだよ。」

呟くような声だった。なんな声を搔き消すように雷の轟音が工場に響き渡る。

少年は怪訝そうな顔で拓弥をみつめた。拓弥はまた、小さくしかしはつきりと言つた。

「いいよ。そのナイフで刺しても。」

拓弥はそこでいつたん言葉を飲み、そしてはつきりといつと言つた。

「もう、死にたいんだ。」

雨音がますます強くなる。拓弥は、力なく微笑んだ。そして、再び意識を失つた。

「死にたい」って思い始めたのはいつ頃からだつて。

薄れゆく意識の中で、真っ暗な暗闇の中で、拓弥は一人夢を見ていた。まるで走馬灯のように過去の思い出が噴き出してくる。しかし噴き出される思いではどれも嫌なことばかり。当たり前だ・・・全部現実のことなんだから。ここ数年、嫌な思い出以外の思い出をみたことがない。眼をそむこうとすればするほど、その思いではまるでハッ当たりのよう強く、はっきり拓弥の中に流れ込んでくる。

「『先日、中学の2階から生徒が転落死しました。カバンからは遺書のようなものが見つかり、イジメが原因ではないかと囁かれています。これについてテレビを』」覧のみなさんどう思われますか?」

『ふんっ、バカバカしい。』

そんな一言で片付けるくらい拓弥にとって自分以外はどうでもよかつた。いや、むしろ世間と拓弥の間には大きな壁があつたのかもしない。拓弥は誰に話しかけるわけでもなく、逆に話しかけられるわけでもない。そんな拓弥は当たり前のようにクラスのでは孤立していた。友達がいなければ変に気を使うこともない、裏切られる事もない、自分がいいように羽を伸ばせる、そんな自分ひとりの世界で拓弥は暮らしていた。イジメられるわけでもイジメるわけでもない、空気のような存在のはずだったんだ。そんな拓弥一人だけの世界が崩壊したキッカケは中学の先輩たちだった。

「やめて。」

拓弥は知らなかつた。先輩が、人がこんなにも恐ろしいものなのだとこうことを。きっかけは些細なこと。夜、街を歩いていたら数人

の不良グループに絡まれ、かつあげされた。「誰にも言つんじゃねえぞ！」そんな常套句を言つて不良たちは去つていった。普段ならやり過ごすが、それは特別大金でもあつたし、その頃の自分にとっては大切な物を買うお金であつた。その頃、拓弥を唯一理解して励ましてくれた（と思い込んでいた）アイドルのDVDを買つためのお金だつた。

「今思うと笑えてくる。あんなもののために僕の人生は。。。」

次の日、親に相談して警察に届けた。その不良たちはここいらでは有名な不良グループだつたらしい。そして、そいつら（クズ）に憧れを抱く（「ミミのような」）先輩たちはこの学校にもいた。不良たちは自分たちのネットワークを最大限に使い拓弥を見つけ出したのだ。このとき既に、“狩り”は始まつていた。

「相手が悪かつたんだと思う。」

あの夜、かつあげをしててきた相手は警察ではもちろん、ここいらでは有名な不良グループだつたらしい。そして、そいつら（クズ）に憧れを抱く（「ミミのような」）先輩たちはこの学校にもいた。不良たちは自分たちのネットワークを最大限に使い拓弥を見つけ出したのだ。このとき既に、“狩り”は始まつていた。

「どうしようもなかつた。」

同級生なら、2、3回無視するだけでイジメをやめてきた、こいつらはそうはいかなかつた。いろいろやられた。ボロボロにやられた。それでも親には学校へ行けといわれた。1日の半分を学校で過ごす拓弥は、いくら嫌でも学校が中心の生活になつてしまつ。心も体もズタボロに引き裂かれた。

ツライ

耳に栓を入れて頑張つた。

タスケテ

聞こえないふりをした。

サミニシイヨ

認めたくなかった。

モウダメダ

「生きたい生きたい生きたい」そう唱え続けた。どんなことがあつても。いつしかそれはクラス中そして学校中に広がつた。もう、何も拓弥を癒してはくれなかつた。待つてるのは真実のみ。残酷な残酷な真実のみ。

「シニタイ シニタイ シニタイ」 いつしかこれが新たな拓弥の呪文に変わつていた。歪んだ。僕の心は歪んでいた。いつしかそれは脳に、顔に、体に現れ、僕は異物と化した。だから、それは高校2年生に入つてからも続いた。そして、修学旅行。いつものいじめは行われた。時間が夜だつたからなのか、修学旅行という行事からなる興奮からなのか、いつもにもましてイジメは凄まじかつた。苦しくて声も出なかつた。

「気持ち悪い。」

ドロドロのヌルヌル。そんな感情が永遠と続く苦しみに拓弥はもがいた。暗闇の中、懸命に首を振つた。

「だから僕は生きることを諦めた。弱すぎる僕は逃げ出したんだ。」

独り暗闇の中、拓弥はそつと呟いた。

## 2 【始まりの雨】

拓弥はゆっくりと目を覚ました。頭の中がぼーとしている。ふと気がつき、自分が生きているか確かめる。ゆっくり起き上がりつてみた。大丈夫・・・足も手も体も全て正常に動いてくれる。そう思うと心から安心した。そして、拓弥は辺りを見回した。

「どこ？」

口から言葉が漏れた。そこは、薄暗く広い長方形の部屋だった。拓弥の知っているいじめっ子や先輩たちがいない代わりに、拓弥の知らない大きなプラスマテレビや派手な服が床に散乱していた。そして、つい先ほどまで拓弥が寝ていたピンクのカバーのベッドがあった。

「どこ、ここ？」

言葉に不安が混じる。拓弥は胸の奥が痛くなつた。ここは、拓弥のまったく知らない部屋だった。

ドンドンドンドン・・・・・遠くから階段を慌ただしく上りてくる音が聞こえた。拓弥は思わず息を潜めた。誰かが来る・・・・・拓弥の顔がこわばつていく。

ドンドンドンドン・・・・・足音はどんどん近づいてくる。拓弥は急いでベッドから降りると、薄暗い部屋で目を凝らしながらドアに近づいて・・・・・ドカッ。床に散乱している服につまずいて倒れた。うつ、拓弥が起き上がるうとしたその時、バン！という音と共にドアが開いた。拓弥はドアをさつと見上げた。そこには、20代前半歳の顔立ちがはつきりしていて、品のあるオーラをまとつた女性が立つていた。女性は拓弥に近づくと強引に腕を取り（拓弥を）立ち上がらせ、そしてそのまま部屋の外に引っ張りだそうとした。不意に引っ張られる力に反発すると、拓弥はそのままのけぞり、また床に倒れてしまった。

女性はそんな拓弥に冷たい視線を浴びせた。そして、静かに口を開いた。

「早く私の部屋から出て行きなさい！」

トゲのあるその声が拓弥の耳に届いた。拓弥は自体が把握できず呆然としている。女は「ふつ」と鼻で笑い、そして左足を振り上げた。足の裏は、拓弥の顔面を向いていた。拓弥が驚いて女性の顔を見ると、女性はいじわるそうに笑いそのまま足を下ろそうとした。その瞬間、別の女性の声が聞こえた。

「おやめなさい。」

声のする方を向くと、ドアに40代半ばの女性が立っていた。

「だつてママ、こんな変こなやつ、なんで私の部屋にいれなきや  
ならないのよ。もうすぐまーくんが遊びに来るの。」

ママと呼ばれたその人（母親）は、諭すように言った。

「わがまま言うんじゃないの、涼子。その子はお父様が拾つて要ら  
した召使いなんだか。」

涼子は、訝しげに母親を見た。

「なんで？ 召使いなら、拓海や朝美あさみがいるじゃない。 なんでわざわ  
ざこんな子を。」

母親は、ため息をついて言った。

「とにかく、あんたも早くダイニングにいらっしゃい。政志さんと  
はそのあとお話しすればいいでしょう。その子を連れて、早く来な  
さい。」

そう言つと、母親はきびすをかえし部屋を後にした。涼子は軽く毒  
づくと、拓弥を見ず威張つた声で言った。

「つこてらっしゃー。」

涼子はスタスタと歩き出し、廊下へと出た。拓弥は、何が何やらわ  
からずただ呆然としていた。

「はやくー！」

廊下から怒鳴られ、拓弥は恐る恐る歩き出した。涼子は、背中で拓  
弥が部屋を出るのを確認すると、すぐに早足で歩きだした。拓弥も  
後について行く。そこは、恐ろしく長い廊下だった。映画やドラマ  
で出てくるような、お金持ちの家のようない部屋が何室もあった。ど  
うやらここは2階らしく、階段を降りると大きな扉に出た。涼子は、  
その扉を両手で勢いよく開いた。

その部屋から溢れんばかりの光が溢れ、拓弥はその明るさ一瞬、  
目を眩ませた。

「涼子、待つていたぞ。早く座りなさい。」

しわがれた、いかめ厳しいその声に従い、涼子は中央に置いてある大きな

テーブルの右側に行く。涼子が近づくと、椅子の後ろに立っていた少年が、涼子のために椅子を引いた。涼子は、「ありがとう。」と言った椅子に座る。

「ほお。君が拓海のピンチを救つてくれたのか。」

しわがれた声の男性が言った。男性は50代くらいで、すこし小太りだが、威厳に満ちた顔立ちをしている。男性はテーブルの真ん中の席（ちょうど拓弥の正面を向いている）に座つていて、拓弥を踏みするような目で見据えた。その左隣のテーブルにはさつきの母親が。この様子を見ると、男性は涼子の父親と見て間違えはない。父親と母親の後ろには、それぞれ白髪交じりの初老と、少女が立っていた。

拓弥はあらん限り目を見開いて、ここが何処なのか考えた。

「そんなに恐がらんでもいいだろ。ほれ、もつと近くに来い。ほら、早く。」

拓弥は男の言われるままに前に出た。男の細い目から見える黒い瞳は、どんよりくすんでいるような気がした。

男がニヤリと笑つた。

「そろそろ食事にするか。」

「ちょっとまつてパパ。その前に聽きたいことがあるんだけど。」

涼子が言つた。男性は、涼子を見ると、はつと気がついたように拓弥に言つた。

「この子は私の愛娘で、この家の長女の涼子だ。そしてこっちが妻の桃子。」

男に紹介され、桃子は軽く礼をした。

「そして私がこの大和泉家の主人、大和泉 太一郎だ。」

そして、涼子の方を向いた。

「それで、聽きたいことと言つのは？」

涼子は苛立たしげに言つた。

「この子をどうするつもり？ まさか、召使いとしてこの家にやとうつもりじやないでしょうね。私には拓海がいるし、ママには朝美が

いる。パパには黒谷くろたにがいるし、もう他の召使いなんて必要ないじゃ  
ない。」

そう言つて涼子は鋭く拓弥を睨んだ。

太一郎は、少し考え込み、言つた。

「いや、この子は私の召使いにする。黒谷は長いことこの大和泉家  
に使えてきて、疲れが溜まっている。そろそろ休息も必要だろ?」  
だから

「それは私をクビになさるということでしょうか。」

黒谷が（太一郎の）後ろから静かに割つて入つた。その口調は、怒  
つているわけでもなく淡々としていた。太一郎は、大きく咳払いを  
して話を続けた。

「そうじゃない。だから、お前と拓弥の2人で私の召使いをやつて  
もらひ。こういう事だ。」

太一郎の言葉を聞くと、黒谷は「それは大変失礼いたしました。」  
と頭を下げた。

「さて、では改めて食事にしよう。」

太一郎が言つた。

「ちょっと待てよ……！」

拓弥が叫んだ。

「ねえ、何言つてるの？意味わかんない……。ここ、何処？僕は  
なんでここにいるの？」

拓弥は慌てふためいた。朝美が心配そうに近寄つてきた。

「大丈夫ですか？心配しなくとも、太一郎様はとてもいい人ですよ。」

朝美が耳元でささやいた。しかしその声は拓弥に届いてない。

「つるさい！」

そう言つて拓弥は朝美を突き飛ばした。朝美は、床に倒れた。

「あさみ！」

拓海が素早く麻美の元に駆け寄ると、キッと拓弥を睨んだ。

「パパ、こんな暴力振るうやつがいたんじゃ安心できないわ。やつ

ぱり今すぐにも追い返すべきよ。」

涼子が言つた。太一郎は、黒谷に耳打ちをすると、黒谷は軽く頭を下げる歩き出した。

「そんなに恐がらなくとも良いだらう。私の召使いは良いぞ。なんでも自由だ。」

太一郎は笑いながら言つた。拓弥の顔が曇つた。

「殺してくれよ・・・。」

咳くように言つた。

「こんなわけの分からぬ所で働くくらいなら、死んだ方がマシだ！」

拓弥はあらん限り叫び声をあげた。

「この子、なんだかやばいわよ・・・。」

涼子は椅子から立ち、軽蔑と嫌悪の目で拓弥を見た。

「あなた・・・。」

桃子も不安そうな顔で太一郎を見た。しかし太一郎に変化はなかつた。

「そうか・・・。それでは仕方ないな。とても残念だが。黒谷、どうやらお客様はお帰りらしい。」

そう言つて指を鳴らした。黒谷は、ちょうど太一郎の後ろにある大きな窓の前でスタンバイしていた。

「お帰りですか。しかし・・・外はかなりの豪雨ですが、大丈夫でしょうか？」

そういうて窓の金具をはずし、両手で窓を押し開けた。

「きや！」（涼子）

窓から強風にあおられて雨粒が飛び込んできた。窓の外では風が荒れ狂い、雨が永遠と降り注いでいる。そして、恐ろしいほどに真つ暗だ。

涼子は拓海に服を拭いてもらいながら言つた。

「何考てるの？床が水びたしになるじゃない。早く閉めなさいよ。」

「

しかし、黒谷はそれを無視し、太一郎は有無を言わせぬ威厳が込められた声で言った。

「それ、どうす?」

「まあ、どうやるって、じわくらいの所、子供じゃないんだから帰れるでしょ。駄もすぐそばなんだし。」

涼子は訝しげな目で言いながら拓弥を見た。拓弥は、一心に窓の外を見つめている。身じろぎひとつせずに。

۱۱۱

突然、拓弥は気持ちが悪くなり、慌てて口を手で押えた。

拓弥は床にひざをついた。外では、風の険しい音が鳴り響く。雨の音が、拓弥の耳の中に入り込む。

「」

拓弥は小さく呟いた。その瞬間、意識が一瞬飛びかけ、それから空と  
んでもない寒気が拓弥を襲った。やめて・・・やめて・・・やめて・  
・・。

拓弥の頭の中で、雜音が、人の声が、そして自分の心の叫び声が混ざり合う。視界が途切れ、テレビで見る砂嵐が映る。

聞きたくない・・・やめて、聞こえない！なにも聞こえない。お願  
い・・・・・違う、僕じゃない。僕はもう、いいんだ。だから

朦朧とする意識の中で、辺りを見回した。さっきのリビングだ。だけど、誰もいない。その時、後ろからすっと拓弥の肩に手が乗った。驚いて振り返ると、そこには黒谷が立っていた。

「ハーフモードだね」

さつきと同じで、無表情で、そして淡々とした喋り方だ。そう言い

さきほど涼子の部屋から来た2階への階段を通り過ぎ、長い廊下を

進んで1番置くの部屋の前に来た。

「ここが、あなた方のお部屋です。」

そう言うと、黒谷はきびすをかえし拓弥を置いてもと来た廊下を戻り始めた。

拓弥は、完全に黒谷が視界から消えるのを見送った後、目の前にあるドアを見た。そして、恐る恐るドアノブに手をとった。

拓弥は生睡を飲んだ。そして、ゆっくりとドアを開ける。

ダイニングに入った時とは逆に、今度は薄暗い闇が拓弥を迎えた。それをみて、拓弥は固まつた。

「早く入れよ。」

ふと暗闇から声がした。拓弥は、右へ左へと顔を動かした。そして、部屋の中に入つたとたん、ドアが勢いよくしまつた。

微かな明かりが部屋に立ち込めた。それは、だんだんと大きくなり、薄暗さが残るままぼどなく止まつた。

「ようこそ。」

拓弥は声のするほうを見た。そして、思わず息を呑んだ。胸に何かがほとばしるのを感じた。そして、絶句した。少年は微笑みながら拓弥を見ている。

なぜさつき、気づかなかつたんだろうか。リビングにいたとき、涼子の召使いとして後ろに立つていた少年。拓海。そいつこそが、あの夜、力尽きた拓弥と出会つた少年だつた。そう、こうなつた元凶である少年だつた。

「どうして。」

ようやく拓弥の口からでたその一言は、一瞬にして暗闇にかき消された。

闇に見守られながらこの瞬間、2人だけの長い長い世界が始まつた

「「Jんな」と続けてていいんでしょうか。なんか、罪悪感を感じます。」

拓海は天井をぼんやりと眺めながら言った。

「こんなことって、拓海からいいだしたんじやない。」

涼子が言った。拓海は、黙つている。そんな拓海を横目で見ながらいつもの強気な口調で言った。

「いいのよあんなやつ。急に約束キャンセルしてさ。それに、私は拓海がいるから。知ってる? 拓海の方がまーくんよりもテクニシャンなんだから。」

涼子はおかしそうに笑つた。そして、布団の中で拓海の手を優しく握つた。

「それは・・・涼子さんの教え方が上手だから。」

拓海は苦笑いを浮かべながら、握られた手を優しく握り返した。少しの間、沈黙が訪れる。

「あの子、どう思つ?」

不意に涼子が聞いた。

拓海の頭に、拓弥の言葉がよみがえり、思わず顔をしかめる。

殺してくれよ・・・

こんなわけの分からぬい所で働くくらいなら、死んだ方がマシだ

!!!

「あんなやつ、嫌いです。」

憎しみを込めていった。涼子は、それを聞いて安心したように微笑んだ。

「そうよね。あいつ、どうかしてるわよ。こんな所で働くくらいなら殺してくれえー、なんて。まったく。パパもどうかしてるわ。」

涼子は言い終えると、ベッドから起き上がり床に散らばった服を着始めた。

「どこか行くんですか?」

拓海はベッドから体を起こして涼子にたずねた。

「明日までにやらなくちゃいけないレポートがあるの。だから友達と一緒に徹夜でやる約束をしたの。」

涼子はいいながら手際よく服を着て、バッグから鏡と化粧ポーチを取り出しきほどの行為で乱れた髪を直している。

「これからですか？」

時計はすでに夜中の12時を回っている。

拓海がベッドからおりようとすると、すかさず涼子が言った。

「そこで寝てていいわよ。私は大丈夫だから。それに、あの子と一緒に部屋じゃ眠れないでしょ。大丈夫。ママが起きてくる前に私の部屋を出でくれればいいから。」

涼子は化粧直しを終えて、化粧品をバッグに入れた。そして立ち上がり、いそいそとドアに手をかける・・・・・と思い出したように拓海の側に戻ってきた。

「これ、今日の分のお金。だけど、変なの。パパの仕事の手伝いでお給料はたくさんもらってるはずだし、第一なんで500円なの？」

拓海のテクニックだつたら、もつとお金を払うわよ。」

拓海は静かに微笑んだ。

「いいんです。金額よりも、お金をもらうといつ事に意味がありますから。」

涼子は、顔をしかめ「へんなの。」と呟つと、枕元に500円玉を置いて、部屋を後にした。

静まり返った部屋。まだ夜明けには程遠い。

涼子さんはたぶん、彼氏の政志さん（まーくん）の所に行つたんだろうと拓海は思つた。今までだつてそうだった。そして、涼子さんはたぶん・・・いや、絶対に政志さんのことを使っている。大好きだ。まあ、俺には関係ないけど・・・。

拓海は、枕元に置かれた500円玉を手に取つた。500円玉を動かして、いろいろな角度から眺めてみるが、遮光カーテンで月の微かな光さえ許されないこの部屋では、きらりとも光らない。

俺にはこれがあればいい。愛なんていらない。自由もいらない。これさえあればいいんだ。だつて俺はお金の為に生まれてきたからさつきの拓弥の言葉を思い出し、拓海は500円玉を強く握り締めた。

そして俺は、絶対に生き抜いてみせる。どんな苦境に立たされたとしても絶対に。

拓弥は布団の中であつと田を開けた。そして、もう一回田を開じる。強く、強く。しかし、やがて観念したように布団から起き上がつた。そつと窓の方を見た。窓にはカーテンがかかつていて、かすかに雨の音が聞こえる。たぶん、窓の外はまだ雨が降っているだろう。

6月だから仕方がない。あと数日して、梅雨が明けたら。そしたら、絶対にここを出よう。拓弥は思った。

トントントントン・・・・・。

わきよつも、ドアを叩く間隔が早くなつてきている。

トントントン・・・・・。

拓弥は、部屋を見回した。窓がひとつ、そして布団や机があるだけの、殺伐とした部屋。結局、拓海はあのあとから部屋を出て行き、帰つてこなかつた。

トントントン・・・・・。

拓弥はしぶしぶドアを開けると、そこには黒谷が立つていた。黒谷はノックする手を止め、拓弥を見据えた。拓弥よりも数十センチも高く、180センチはあろうかと思う身長とガリガリに瘦せた身体、そして鋭くびがつた目つきは拓弥が今まで会つたことのあるどの人間よりも威圧感がある。

「すでに10分の遅刻です。早く行きますよ。」

そう言つと、黒谷は足早に歩いていった。拓弥は静かにその後をついていく。

そうだ、とりあえずこいつらの口使いになつていればいい。時がきたら、絶対にここから逃げ出す・・・拓弥は再び思った。

やがて、案内されたのは太一郎の書斎だった。ドアの前で、黒谷は止まつた。

「太一郎様は、土日にはこうして書斎にこもられて本を読んだり書いてたりしています。あなたの仕事は、それをお手伝いすることです。

「そう言つと、ドアをノックした。

「どうぞ。」

中から太一郎の声が聞こえた。黒谷は、一歩さがり、拓弥に先に入るように促した。拓弥は、恐る恐るドアを開けた。

そこは、数え切れないほどの本に四方囲まれた部屋だった。正面では、太一郎が机に向つて何か書き物をしているようだつた。拓弥が恐る恐る両足を部屋に踏み入れたその瞬間、

バタン！

突然ドアが閉められた。拓弥はさつと振り返つた。ドアノブをまわすが、すでに鍵が掛けられている。拓弥は、押したり引いたりしたがまつたく開かない。

「来たか。」

太一郎が独り言のように呟いた。その声に気づいて、拓弥は太一郎に目を向ける。太一郎は、ゆっくり椅子を回転させて拓弥の方を向くと近くに来るよう指示をした。

「いやです。」

声が震えているのが自分でも分かつた。太一郎は、顔をしかめ、そして言つた。

「大丈夫だ。さあ、きなさい。」

そう言つて手招きをしていく。

「・・・・・・」

拓弥が押し黙つていると、太一郎は淡々とした口調で話し始めた。

「拓弥、君をなぜ私の召使いにしたか理由を話してやる。」

私は旅館関連の社長をしているんだ。自分で言うのもなんだが、これがかなり大きい会社でね。先代、先々代から続く老舗中の老舗だ。規模も他の旅館やホテルとは比べ物にならんだろう。しかし、今でこそ仕事に充実感を覚えてはいるが、この仕事は私が選んだ仕事ではないんだよ。」

太一郎は椅子から立ち上がると、拓弥の方に歩み寄った。

「君に分かるか。生まれた時から、自分の将来が決まっている絶望感が。どんなに悪いことをしようと、どんなに頑張つたとしても、どんなに道を外れようと努力しても、結局出口は一つしかないんだよ。私はここの一人生として大事に育てられていた。」

太一郎は、拓弥の前に来ると二コリともせず拓弥を見据えた。

「しかし、それはあくまで和泉家の跡取りとしてだ。親父は私のことを1ミリたりとも愛してはくれていなかつた。いつでもどこでも監視され、何もかも決定権は親父にあつた。交友関係も、全て親父が決め、婚約相手も親父が勝手に決めてきた。そして、私の夢までも消されてしまった。」

太一郎は強く握った拳をふと弱め、そして微笑んだ。

「しかし、悪いことばかりじゃなかつた。私が成人してすぐに親父は事故で他界し、私は晴れて旅館の若社長になつた。そして、溢れるほどの財産や権力が手に入つた。自分に逆らうものは容赦なく切り捨て、自由も手に入れた。全て満ち足りた生活をしていた。しかし・・・」

太一郎は、そこで少し間を置いた。

「ある日突然気づいてしまつたんだ。私の心の奥底に潜む空虚感。結局私は、親父の道具になる為に生まれてきたんだということに。そう、これは私の人生じゃない。親父の人生の延長線なんだつてことに。そう考えると、無性に腹が立つて、そして再び親父への嫌悪感が芽生えた。絶対に見返してやる！そう思つたんだ。拓弥。私はね、実は作家になりたかったんだよ。小さい頃から夢中で原稿に筆を走らせた。しかし、そんなものになれるわけがない！と親父はい

つも言つていた。だから、見返してやるりたいだよ。金や権力を使わず、私の才能だけで私の書いた小説を世の中の一般人や著名人に認めさせ、その才能を天国にいる親父に知らしめてやるんだ。」

【ドン！】

太一郎は、突然握り拳を作り思いつきり前に押し当てた。それは、拓弥の頬をかすめドアに叩きつけられた。太一郎は、無表情を装っているが、顔中の血管が浮き出ている。

「しかし遅すぎた。私にはもう、昔みたいに次々とストーリーを浮かべる想像力はない。権力や財力といった汚さに埋もれ、私の想像力は親父によつて奪われた。でも、それでも私は親父を見返さなければならない。

そこで君に少し手伝つてもらいたいんだ。なに、簡単なことだ。今から少しの間、私の書く小説の主人公を演じてくれればいい。」

拓弥は恐ろしさに体を震わせた。何か、身の危険を感じる。

「今回の話は惨めな少年を題材にしている。いつも主人に虐待されている可愛そうな主人公。・・それがお前だ。」

【ドス！】

不意に拓弥は脇腹を殴られた。

うめき声をあげながら拓弥は倒れようとしたが、今度は太一郎の右手が拓弥の服を掴んだ。

ドス、ドス、ドス。その鈍い音と拓弥のうめき声と共に、部屋のドアが微かに揺れる。廊下では、黒谷が無表情で揺れるドアを見つめていた。

一方、仕事から帰ってきた拓海は自分（そして拓弥）の部屋のドアを開けた。そこに拓弥の姿はない。

「どこいったんだ、あいつ。」

拓海は部屋の中に入ると、ベッドのふちに腰を下ろした。そして、ズボンをめぐりあげた。右の膝に、真新しい擦り傷がついていた。

「いたつ。」

拓海は眩き顔をしかめた。膝は、乾いた血で染まっていた。

その時、開けたままだつたドアから声が聞こえた。

「拓海。」

拓海が顔を上げると、そこには朝美が立っていた。

「朝美。」

拓海は驚いて立ち上がった。

「どうしてここに？」

拓海が立ち上がり、朝美の方に歩い「いつとする。

「来ないで！」

朝美が叫んだ。

「来ないで・・・。」

今度は、小さく言つた。

沈黙が2人を包む。

朝美が、うつむくと、ふと傷口が目に入った。

「それ、」

朝美が拓海に近づくため部屋に入り「いつとして、何かを思い出したかのように慌ててその足を引っ込んだ。

「痛そう・・・大丈夫？」

朝美が心配そうに「ドアから傷口を見つめる。

「ああ。」

拓海が答えた。朝美は、ポケットから絆創膏を取り出して、手を差し伸べた。

「桃子さん、園芸が趣味なんだけど、たまに葉っぱで手を切る」と  
があるの。だからいつも持ち歩いてるの。」

拓海は絆創膏を見つめ、申し訳なさそうに言つた。

「「めん、それは受け取れない。涼子さん、そういうのに鋭いから。

「・・・そうだよね。」

朝美は悲しげに言つと、そつと絆創膏をポケットにしまった。

「私が言える」けど、もつその仕事は辞めた方がいいと思つ。」

朝美の顔が心配でこわばる。

「だつてさ、拓海の仕事は涼子さんのお世話でしょ。そんなことまでする必要あるの？」

「・・・・・」

拓海は黙つたまま下を向いた。朝美の語気がだんだん強くなる。

「私、たまたま太一郎様が黒谷さんと話してゐるのを聞いたんだけど、ヤバイ相手にヤバイ商品を渡す仲介屋・・・それが私たちの主(つまり太一郎様)の裏の顔だよね。

・・・ そうだよね、いくら老舗の旅館の社長だからって、この不景氣な世の中でこんな贅沢三昧できるわけないよね。でも、私は太一郎様が裏で何をやつていようとかまわない。それはあの方の勝手だから。でも、拓海がそんなことする必要はないでしょ。」

「あるよ。」

拓海はうつむいたまま静かに言つた。朝美は、悲しい目で拓海を見つめた。

「お金のため？」

拓海は黙つて頷いた。朝美は悲しみを押し殺して言つた。

「ねえ、涼子さんはこのことを知つてるの？涼子さんが知つたらきっと、悲しむと思うな。だつて、あの優しい涼子さんが、私から奪い取るほど好きな拓海がこんなことを

「涼子さんは関係ない！」

拓海がピシャリと言つた。そして、顔を上げて朝美を見る。

「心配してくれるのはすぐ嬉しい。でも、ごめん。俺は、やりたくてやつてるんだ。いくら涼子さんの口使いをした所で、それはここに泊らせてもらつてることや、食事の用意をしてもらつてからお金はもらえない。だから仕事をやつてる。俺は、お金を稼ぐために生きてる。だから、それをやめたら、俺が俺じゃなくなる。生きていく目的がなくなる。俺は生きていたんだ。ずっとずっと

拓海が言った。

朝美は、泣きそうな声で答えた。

「『めんね。ちょっと様子を見に着ただけなのに変な』こと言ひちやつて。まったく、ダメな子だよね私。ただ、最後に教えて。じゃあ、何のために生まれてきたの？お金を稼ぐためだけに生まれてきたの？」

拓海は、少し間をあけて言った。

「そんなの、母さんに聞いてくれ。」

それを聞くのと同時に、朝美は拓海に背を向け部屋を後に走り出した。床には真新しい涙がこぼれていた。朝美の胸には、深い深い傷が、また一つ増えた。

朝美が服の袖で涙を拭いていると、廊下の先に黒谷が立っているのが見えた。

肩には、拓弥を担いでいる。朝美は、一瞬で体が緊張し、心臓が高鳴った。

素早く目線を下に向けた。なるべく黒谷の目を見ないよう、うつむきながら早足で黒谷の横を通り抜けた。

「この先で、何をなされていたんですか？」

黒谷が静かに言った。麻美はそれに答えることなく足早に廊下をかけていった。黒谷は、それを無表情で見つめていた。

拓海は、目を閉じた。

「やめてください。」

「までも聞こえる。」

「キヤア——」

あのおぞましい悲鳴が。

「朝美！——」

俺のせいで朝美は。

「あなたは私の召使いでしょ。なのに、こんな

ただ、一緒にいたかつただけなのに。

俺はお金のために生まれてきた。俺が恋をするなんて、許されなかつたのかもしない。だから、バチが当たつたんだ。だけど。

拓海は目を開け、部屋を飛び出そうとした。その時、ドアの脇からすつと、黒谷が顔を出した。拓海は思わず立ち止まつた。

黒谷は鋭い目で拓海を見下ろしている。鷹のようないい鋭い目・・・、ここに入った当初、いや今も拓海の恐怖だつた。

拓海は思わず後ずさりした。

黒谷は、そんな拓海のことはお構いなしに肩に担いでいた拓弥を床に置いた。

「お前！」

拓海が思わず声を出した。拓弥は、目を閉じて身動き一つしない。

「どうしたんだ？」

拓海が拓弥に声をかける。

「・・・・・・・」

黒谷は、きびすを返し拓海に背を向けた。

「大丈夫か！」

拓海は、拓弥をベッドへと移動させようと背に拓弥を乗せた。

拓弥は目を開けた。薄暗い。ふと横を見ると、拓海が机に向い座つてスタンンドの明かりで本を読んでいる。拓弥は上半身を起こした。すると、脇腹に激痛が走つた。

「うつ」

思わず上げたその声に気づき、拓海は天井の明かりをつけ、側にやつてきた。

拓弥の視界に、拓海の顔が映る。しかし、それはぼんやりと形を変え、太一郎へと変化していく。あの、何ともいえない不気味で憎悪に満ちた顔が。

「やめて！」

拓弥は叫んだ。額には汗がびっしょりとも垂れている。

そんな拓弥を心配そうに見つめる拓海が声をかけよつとすると、拓  
弥がぼそりと言つた。

「帰りたい・・・。」

そして拓弥はベッドから起き上がつた。しかし、脇腹の痛みにつん  
のめる。拓海は慌てて拓弥の体を支える。

はあ・・・はあ・・・はあ・・・。

拓弥はやり場のない怒りに拳を強く握つた。

「なんで僕ばっかりこんなめにあわなきやいけないんだよーなんで  
僕ばっかり！ー！なんでだよ。もうヤダ・・・。もういや。」

拓弥は拓海を睨みつけて言つた。

「あの時・・・本当に僕を殺してくれればよかつたのに。」

その言葉を聞いて、拓海の顔が曇つた。

「なんだよそれ・・・。俺が全部悪いみたいに。確かに、巻き込ん  
だのは俺だし、俺が悪いと思ってるけど・・・。でも、なんでそん  
なに簡単に殺せとか言えるんだよ？悪いけど俺、お前のそういう所  
が好きじゃない。」

そう言つて拓海は拓弥に背も向けた。

「それと・・・今、外は雨が降つてるから。」

小声で言つた。とたんに、拓弥の耳にあの雨の音が大音量で聞こえ  
てきた。

うつむいた拓弥の瞳から涙がこぼれた。

誰もわかつてくれない。このつらい気持ちを。雨が上がつたら絶対  
にこの家をでる。それまでの辛抱。考えてみれば普段どおりにして  
ればいいだけ。そう、いつも学校でやつてるみたいに、自分の感情  
をなくして、自分自身を人形と思えば・・・大丈夫。

拓弥は黙つて考え込んだ。それを心配した拓海はボソリと言つた。

「降雨は今週いっぱいで終わるって新聞に書いてあった。」

そんな拓海の声を聞いて拓弥は不機嫌そうに

「もういい。」  
と小さく呟いた。

次の日の朝、拓弥は自分（もう一人の自分）を「綾人」と名付けた。綾人と名付けられたその人形は、土日になると必ず主人に呼びつけられて、暴力を与えられた。それでも綾人は感情がないから、暴力を痛いと感じない。太一郎を憎いとも思わない。自分をかわいそうとも思わない。

「なんだその抜け殻みたいな目は。もつと、もつと人間らしくしろ！」

（聞こえない）

「おい、もつとこっちに来い。いいか、次の場面は重要だ。主人公が不良に絡まれてボコボコに殴られるシーンだ。さあ、いくぞ！」  
(いたいのは僕じゃない。もう一人自分、『綾人』だ)

「もつとだ。もつと痛そうな顔をしろ！ もつと、もつと、もつと…！」

（感じない。何も感じない。痛みも苦痛もなにもかも感じない。）  
「痛い。」

拓弥はそう言いながらお腹を抱えながら床に倒れた。呼吸が乱れ意識が朦朧とする。

太一郎はそんな拓弥を見下し、冷めた目で見つめ部屋の外で待機している黒谷に言った。

「おい、こいつをつまみ出してくれ。インスピレーションが湧いてきた。邪魔をされたくない。今日はもう誰もこの部屋に近づけるな。」

ドアが開き黒谷が入ってきた。黒谷は、いつも通り無表情で拓弥を抱きかかえると静かに部屋を後にした。

（シニタイシニタイシニタイシニタイ）

拓弥は心中で静かにその呪文を唱えた。

その夜、久しぶりに拓海は部屋に帰ると、拓弥が布団もしないで仰向けに寝ていた。たぶん、あざが痛くてうつむけで寝れないんだと拓海は思った。

拓海は、静かに（自分の）ベッドの淵に腰掛けた。雨の音がする。ほんの微かに聞こえるだけだが。

「おい・・・起きてる？」

拓海が言った。しかし、返事はない。

「やつと梅雨明けのきざしが見えてきたらしい。」

「・・・・・・・。」

「明日は、全国的に晴れるってニュースでやつてたぞ。この地区は、降水確率5%だつて。」

「・・・・・・・。」

「明日、太一郎様は会社だ。」

「・・・・・・・。」

「もしお前が逃げたいと思つてるんだつたら、明日が絶好のチャンスだと思う。」

ザーーー。雨音が2人を包む。この夜、これ以上拓海が話しかけるはなかつた。

翌日の夕方、拓海は一人通りから通りへと疾走していた。時々後ろを振り返ると、黒いスーツにグラサンをした若い2人組みの男が拓海の後を追つてくる。

「拓海、こっちだ！」

拓海は、自分を呼ぶ方に走つた。雨が拓海の体を打ちつける。四方八方に通行人が歩いている。拓海は行きかう人々ををよけながら走り、車に乗り込んだ。

「ちゃんとアレを持つてきつたか。」

運転席に座っていた男性が言った。

「はい。」

息を切らしながら拓海が答える。男性は、バックミラーで黒スースの2人組みが追いかけてきているのを確認すると、車を急発進させた。手馴れた様子でハンドルとまわすと、瞬く間にスースの男たちはバックミラーから消えていった。

車は全速力で走り、2人を乗せたまま暗いトンネルの中に入つていった。

「よく戻つてこれたな。」

男性が言った。

「はい。」

拓海は窓に映る自分の顔を見た。恐怖で顔が青ざめている。男性が無言でトンネルを走つていると、不意に拓海が言った。

「今日の天氣が雨だつたから・・・足音が雨音に消されて。もし、今日が晴れだつたら確実に・・・。」

そう言って拓海は黙り込んだ。男性は、バックミラーで拓海を見た。「俺が言うのもなんだが、こんな目にあつてまで金が欲しいか？」

男性が言った。拓海は、黙つてしまう。

「まあ、確かに金はいいもんだよ。金さえあればなんでも出来る世の中だからな。金はいくらあつても邪魔にならない。紙だから場所も取らないしな。ただ、お前はまだ若い。こんな仕事、命がいくつあつてもたりない。今ならやり直しがきくつてことだ。まったく、こんな仕事をこんなガキにさせる方もさせる方だけどよ。」

男性は自分に言うように言った。

拓海は、少し口を開いて言う。まだ少し声が震えている。

「それでも、前よりたくさんお金がもらえる。」

「そうか。」

男性は無表情でバックミラー越しに拓海を見つめる。サングラスで隠れていて見れないが、その目は拓海を哀れみに満ちた目で見つめていると拓海はわかつていた。

少し沈黙が続き、拓海が不意に言つた。

「それに、俺には死なない呪文があるから。」

「呪文？」

男性の眉が釣り上がつた。哀れみに加え、いぶか訝しげな感情が瞳に増えた。

「いま、「生きたい、生きたい、生きたい」って心中で繰り返し思いながら逃げてきたんだ。」

拓海は頬を緩めて言つた。

男性は、ふつと鼻で笑つて言つ。

「子供だましだな。」

そして2人は沈黙に入つた。車はまだ出口にたどり着けないでいた。

拓海が自分の部屋に帰ると、中は真つ暗だった。電気に手を伸ばそくとして、手を止めた。よく目を凝らすと窓辺に誰かが立っていた。拓海は無言のままドアを閉めると、目を凝らしてベッドにたどり着き、仰向けに寝転んだ。この部屋は、他の部屋と違つて月明かりがよく降り注ぐのだが、今日は真つ暗だった。スタンンドに手をかけると、ぼうつと小さな光が拓海の周りと照らす。

「シニータイ。」

「は？」

拓海は閉じかけていた目を開いた。小声だが、拓弥の言つていることがはつきり聞き取れた。

「シニータイシニータイシニータイ。」

拓弥は無表情で窓の外を見つめている。

「シニータイ。」

「つるさいー。」

拓海がベッドから起き上がり叫んだ。

「そういうこと言わると、こつちまで気がめいるだろ。」

拓海が静かに言つた。

わずかな沈黙の後、拓弥が言つた。

「僕が何を言おうと僕の勝手だろ。」

「でも、そういう言葉は聞きたくないし、口に出すものでもないだろ。」

拓海が言い返す。

「別に本気で思つてるわけじゃないからいいでしょ。ただ、シーナイって心の中で何回も繰り返すと、すごく気持ちが楽になるんだ。もう頑張らなくてもいいんだなって思つ。」

「お前、早く逃げ出した方がいい。このままだと、体も心も持たない。」

拓弥は含み笑いをした。

「簡単に言つんだね・・・逃げたらいいなんて。でも僕は別に嫌なことは何もないよ。ただね、綾人って子がいるんだけど、あの子はかわいそうだよ。だつて、いつもぶたれるんだよ。今日なんか、筆で思いつきり突かれて。それでも、痛さも、辛さも、悲しさも感じない。」

そこで一息溜めて、拓弥は続けた。

「あの子は、人形だから。」

部屋には、いつものように雨の音が響いている。

拓海は黙つたまま窓を見た。そこには、瞳から大粒の涙を流している拓弥が映つっていた。拓弥は起き上がり、拓弥の前まで来て思いつきり息を吸つて言つた。

「お前は人形なんかじゃない。お前は生きている。それに、綾人じゃない。お前は」

「いやだ！」

突然拓弥がしゃがみ込み耳をふさいだ。

「聞きたくない！なんにも聞こえない！」

そう言つて手のひらを耳に強く押し当てる。しかし、拓海は拓弥の肩を掴むと自分の方に顔を向けさせた。

「お前は拓弥だ！綾人なんかじゃない。お前は生きてるんだ。」

「うそだ！」

「殴られてるのも、筆で突かれたのも全部おまえ自身なんだ！」

「違う！」

「違わない！お前は人形なんかじゃない。ちゃんと血の通った人間だ！」

「嘘だ、そんな証拠は何にもない！」

拓弥は腕を振り払うと拓海を押しのけた。

「嘘じやない！」

それでも拓海は拓弥に歩み寄つていく。

「やめて・・・。」

拓弥の悲鳴が部屋に響いた。

「その涙が証拠だよ！」

拓海は、キッと拓弥を睨んで言った。負けじと拓弥も睨み返す。

「お前なんかと出会つたせいで、僕はこんなことになつたんだ。」

「ムカツクんだよー。そうやつて、自分が世界で一番不幸ですつて顔されると。」

「だつて実際そうだもん！」

「・・・・・・。」

「もうヤダ・・・。もういい。もう死に」

「黙れえ！――！――！――！」

拓海の怒声が部屋中に響いた。拓海は、なんとか荒くなつた息を整えようとしている。

拓海の息が落ちつた頃、今度は嗚咽が響いた。目の前には、声を抑えて涙を流す拓弥の姿があつた。

雨は無情にも、さつきより雨音をまして部屋の中に轟いた。

「感情的になつてごめん。」

拓海は言つたが、拓弥にただひたすら泣くだけだった。

「」の世に偶然なんかない。あるのは必然だけ。拓弥と拓海が出会つたのも必然。しかし、神様のちょっとしたミスから生まれた偶然が、思いもよらない悪夢への入口となることもある。

この日、雨を降らせてしまった神が犯したミス（偶然）が、拓弥を含むこの家の全ての人間の人生を狂わすことになるとは、神すらも知るよしもなかつた

#### 4【『友達』】

朝目を覚ますと拓弥は窓の外を見た。相変わらず雨が降り続いている。しかし、拓弥の心はなぜか昨日に比べて晴れていた。

何ヶ月・・・いや、何年ぶりだろう。あんなに大声を出したのは、あんなに誰かと喧嘩したのは。そして、あれだけ本音を叫んだのは。昨日の夜、僕はちょっとした混乱状態だつた。だけど、これだけははつきり覚えていることがあつた。拓海・・・拓海の真剣な顔だつた。あんな顔、今まで誰も僕にしてくれなかつた。

久々に大声を出して喉が痛い・・・そう拓弥が思つていると、後ろから拓海の声がした。

「昨日は悪かつたな。」

「別に・・・。」

拓弥はそつけなく答えた。だけど、拓海の声を聞いても、昨日みたいにムカついたりしなかつた。

拓海はパジャマから私服に着替え始めた。拓弥は、それを窓のガラス越しに黙つて見つめた。

拓海は着替え終わると、ドアを開けて廊下に出よつとして、いつたん止まつた。

窓ガラス越しに動きの止まつた拓海を怪訝そうに見つめる拓弥。どうしたんだ?

「じゃあ行つて来る・・・拓弥。」

そう言つて拓海は部屋を後にした。部屋には拓弥一人になつた。窓ガラスに映つた拓弥の顔が、少し緩んだ。

今日は水曜日。拓弥にとつて安全な日である平日は、屋敷の掃除だとか、書斎の整理整頓<sup>せいりせいとん</sup>が主な仕事だった。黒谷はたまに外に出かけることもあるが、基本的に外の太一郎の世話は秘書の役目なので、拓弥が外におつかいを頼まれることはなかった。平日の夜中、太一郎が家に帰ってきてから書斎に呼ばれることがあったが、今の拓弥の頭の中は拓海でいっぱいだった。

『友達』の一文字が拓弥の頭の中に浮かんでいた。小、中、高校と友達が一人もいなかつた拓弥。同級生に話しかけられても相手にするのが面倒で無視ばかりしていた。いじめにたえることに必死であつたし、友達なんていらないと思った。一人じゃなにも出来ない人間、一人の時は弱いのに、友達の輪の中に入ると急に仲間と連携し虚勢を張る連中。全部大嫌いだった。日々話す話題が尽きないよう必死にテレビを見たり、学校の外でもメールで繋がつての証を示そうとするやつらをバカらしく思え、蔑んでいた。

それが『友達』。僕の中では、忌み嫌うべき無駄なこと。それが『友達』。しかしその一方で、時々（本当に時々だけど）羨ましく思うこともあつた。自分と同じ匂いのするグループを無意識に見つめていた。もしも自分があそこのグループに入つたらという妄想を何度もしていた。愚痴や昨日の出来事を面白そうに笑いながら話しあつて、たまにいたずらなどのおふざけをしては笑い合う。それも『友達』。ドラマみたいに窮地の時には助けてくれる、それも『友達』なのだろう。

拓弥の中でいろいろな『友達』が交差していた。もしかしたら僕は、拓海にその『友達』を求めているのかもしれない。

そんなことを考えながら、永遠と続く長い廊下の床を拭く手を止めていると、廊下の置くから甲高い声がこっちに向つて歩いてきた。「ちょっと、なに休んでるのよ。あんたはタダでこの屋敷に住ませてもらつてるのよ。だから休憩なんて1分たりともないのよ。さつさと働きなさい。」

その甲高い声の主は涼子だった。拓弥は涼子を一瞬睨みつけたが、

視線を下に戻して雑巾を動かし始めた。

お金持ちの愛娘は決まって性格が悪い……それがテレビドラマのセオリーだが、現実でもそうだったんだ、と拓弥は涼子と会つて思はれられた。

「ほら、ここ汚れてるでしょ。わかつてるの？」

涼子の声が頭の上から聞こえる。拓弥は、無言で涼子の指示に従つた。

その態度に、涼子の目が変わつた。

### 【口ツン】

突然、拓弥の目の前にイヤリングが落ちてきた。

「あらっ、耳からイヤリングがハズレちゃつた 拓弥君、悪いんだけど拾つてくれない？」

拓弥が顔を上げると涼子は今までに見たことのない満面の笑みで、拓弥と目が会うといかにも女子らしく微笑んだ。

拓弥は、そんな涼子を怪しみながら、また無言でイヤリングに手をかけたその時、

### 【グシュ】

「ぎや～！！！」

あまりに突然の出来事に、拓弥の叫び声が裏返つた。拓弥の右手から血が流れ、さつきキレイに拭いたばかりの床を赤に染めていく。

拓弥の右手の上には、涼子の片足が乗つかつっていた。そして、拓弥の手の中では、イヤリングの細い針が拓弥の柔らかい手の肉に突き刺さつている。しかも、涼子はなおも踏む力を緩めようとしない。

「うわあああ

クチュクチュと針が食い込む。その度に血が溢れる。

拓弥は必死に手の平を開けようとする。そんな拓弥を見て、涼子は笑いながら強く言つ。

「あなたが私を無視する権利なんてないのよーちゃんと呼ばれたら返事をしなさい。ドブネズミのように地べたを這いずり回つて私の元に来るのよ。覚えときなさい、この屋敷で私は女王様。あなたは

ドブネズミなのよ！私のことは女王様とお呼び！わかつたら返事  
しなさい、このドブネズミ……！」

やつと涼子の足の力が緩んだすきに、手を引っこ抜いた。恐る恐る手を開くと、そこには真っ赤に染まつた手の平と、その中で赤く煌きらめくイヤリングがあつた。

拓弥は絶句し、そして恐る恐る亮子の顔を見上げた。拓弥が信じられないという田で涼子を見ると、その瞳に写つた涼子は微笑んだ。さつきの微笑とはまるで違つ、いやらしく汚らしい笑みだった。

「一度と私を無視したら許さないんだから。」

涼子はそう答て、紅茶を啜へると、わひすを返し血分の詰まくと嘗て

いふたるはいふたる

を動くことが出来なかつた。

## その日の夜。

拓弥は自分の部屋のベッドに腰掛けていた。時々思い出したよう、「ブルブルを体が震える。涼子のあの不気味な笑顔を早く忘れてしたいのに、なかなか頭から離れてくれない。

「拓海、早く帰つてきて・・・。」

拓弥はぼそりと呟いた。そして、ふと右手に田線をやる。右手には包帯が巻かれていた。あれからすぐに、学校から帰ってきた麻美が手当をしてくれたのだ。

麻美は拓弥と拓海の2つ下の中学2年生で、平日は地元で有名な私立女子中学校へ通っているらしい。部活はやっていならしく、家に帰つてくるとすぐに着替えて、桃子の世話や、厨房に入り料理の手伝いなんかをする。身長は小さく、目がくりくりしていて、髪はセミロング。少女マンガの中から出てきたような美少女だ。

手当ての途中、涼子にやられたのだと呟つと、麻美の顔が急に強張つた。そして、静かに呟つた。

「あの人には近づかない方がいいよ。いろいろとお世話になつてからこんなこと言つるのは忍びないんだけど、あの人は自分のことを女王様だと思つてゐるけど、本当はヘビみたいな人。気に入らない獲物は徹底的にいじめて、その獲物が自分に降伏するまで決して攻撃を緩めようとしないの。・・・あつ、もちろん悪い人じやないんだよ。ただ、なんていうか気が強い人なんだ。」

拓弥は麻美が言つたその言葉がずっと心の中でひつかかっていた。確かにあいつはヘビみたいな女だ。

「拓弥？」

不意に名前を呼ばれた。顔を上げると、拓海が帰つてきていた。拓弥はとつさに右手を布団の中に隠した。なぜか、拓海にだけはこの傷を見られたくないかった。

「ほんやりしてどうした?」

拓海が心配そうに聞いた。

「別に。」

拓弥は何事もないかのよつと答えた。

「それよりさ、今日の仕事、どうだつたの?」

拓弥の声色が急に明るくなつたので、拓海が少し驚く。その顔を見て拓弥が聞く。

「どうしたの?」

「いや、急に声が明るくなつたから。」

「ごめん・・・今日一日中ずっと、早く拓海と話したいなつて思つてたから。もしかして迷惑だつた?」

拓弥の顔が曇つた。それを見て拓海は優しく微笑む。

「そんなことないよ。うれしいにきまつてるじやん。だつて、ここ数年同世代の同性と話す機会なんてなかつたし。」

拓海の言葉や微笑みに、拓弥はほつと胸をなでおろした。

「今日は、お得意様の会社からの預かり物を他の会社に運ぶ仕事をしたんだ。」

「預かり物つて？」

拓弥が不思議そうに聞くと、拓海は肩をすくめた。

「さあな、大きいカバンが1個だけだつたけど、中身は見ない決まりになつてゐるから。

それより聞いてくれよ。明日からもつと重要な仕事を任せられるようになつたんだ。」

拓海が嬉しそうに言つ。

「そんなに仕事して、楽しいの？」

拓弥には、どうしてこの仕事が楽しいとは思えない。それに、仕事が入ると拓海と会える時間が少なくなる。もつともつと話したいのに・・・。

「どうだらう。危険な仕事ばかりだよ。たぶん拓弥じゃ無理だな。でも、いやらしい話だけど給料はいいんだよ。」

拓弥はその言葉で思い出した。そういうえば、ここに来てからすぐに1度拓海が机の引き出しの封筒に、大事そうにお金を入れているのを見たことがある。封筒の厚さからして相当の金額を貯めているのだと思う。

「ねえ、なんでそんなにお金が欲しいの？」

不思議に思った拓弥はすかさず聞いてみた。

「あ〜、それは秘密だな。」

笑いながら拓海は答えた。

「もしかして、欲しいものとかあるの？僕が手に入れられるものだつたら、プレゼントしようか？」

拓海は一瞬、黙つてしまつた。そして、微笑み言つ。

「ごめん、俺の欲しいものは拓弥じゃちよつと手に入らないものなんだ。」

その言葉は、ちよつと悲しみを帶びていた。

「それより、拓弥こそどうなんだよ。太一郎様の召使い。たまに、アザとか作つてくるけど・・・。」

拓弥はチラツと右手に目をやつた。布団に隠れた右手には、生々し

く包帯が巻きつけてあった。太一郎といい涼子といい、こここの家系は人を傷つけるのが好きらしい。

拓海は本気で心配そうな顔をしてこちらを見つめる。

「ううん。大丈夫だよ。それに、時期がきたらここから逃げるつもりだし。」

「そうか、なんかあつたら絶対に俺に言えよ。出来る限り助けてやるから。」

拓海のその言葉に、拓弥の心の中で何が広がった。

「ありがとう。」

拓弥は微笑んでいた。その顔を見て拓海はクスッっと笑った。

「拓弥の笑ってる顔を初めてみた。拓弥は笑ってる方が、かわいいぞ。」

拓弥の心中では、数年前から心の奥底に閉じ込められていた『喜び』という感情で溢れた。

「ありがとう。」

拓弥は照れくさそうに言つた。

「じゃあ、明日も仕事だから俺は寝るよ。お互い頑張りうな。」

拓海が布団に入ろうとした時、不意に拓弥の口から言葉が漏れた。

「僕たちって、『友達』なのかな?」

拓弥の言葉に震えが混じる。聞くの、ちょっと早すぎたかな?

「あたりまえだろ。」

拓海は拓弥の目を見てしつかりそう答えた。

拓海の優しい声に、なんだか少し涙が出そうになつた。

翌日、拓弥は昨日と同じ廊下を掃除していた。怪我をした右手が水にしみる。昨日、拓弥の血がついた所は黒谷によつてキレイに掃除されていた。しかし、意識を集中してよく見ると、他の箇所に比べて少しシミがついてる。

拓弥は、吐き気を覚えた。その場所を見ないようにしてるつもりで

も、自然と目がそこにいつてしまつ。心臓が高鳴り、胃がキリキリする。

「大丈夫・・・大丈夫・・・大丈夫だ。」

何度も繰り返し、自分を落ち着かせる。

「大丈夫？」

急に後ろから声をかけられ、心臓が破裂しそうになつた。恐る恐る後ろを振り返ると、そこには麻美が心配そうにこちらをうかがつていた。

「もしかして、まだ傷口が傷むの？今日は私の中学校、開校記念日でお休みだから手伝おうか？」

拓弥は小刻みに首を横に振り、「大丈夫です。」と小さく呟いた。

「遠慮しなくてもいいよ。」

そう言い麻美がぞうきんを取ろうとした瞬間、後ろから足音が聞こえた。

「何をやつてるの？」

この声だ。拓弥の額に汗がにじむ。右手がズキズキ痛み出す。足音はどんどん近づき、拓弥の背後で止まつた。

「返事はどうしたの？」

「・・・はい。」

拓弥は恐る恐る返事をした。下唇を前歯で噛んで、なんとか口の震えを止める。

ヘビだ。女王と偽り、他の人間をドブネズミさげすと蔑む悪魔のヘビ女だ。

拓弥は後ろを振り返つた。

涼子は、目が会つても昨日みたいには微笑まず、恐い形相で拓弥を見つめている。

「あんた今、何をやつとしたのよ。」

「は？」

拓弥は意味が分からず、ただ恐れる目で涼子を見た。

「とぼけるんじゃないわよ。今、麻美に仕事を押し付けようとした

でしょ。私、見てたんだからね。」

拓弥は学校に居たいじめっ子を思い出した。あいつらは、何かとい掛けりをつけては僕に突つかかってきた。

「涼子さん、それは違います。私が手伝いますと言つたんです。拓弥君は右手を怪我してるし……」

麻美は言い終えて、はつと気づいた。涼子の目がさつきより鋭くなつて自分を睨みつけている。

「へえ、それで？その怪我は私のせいって言いたいの？だから拓弥が掃除できなつて言いたいの？」

「そうじゃないです。・・・『ごめんなさい。』」

間髪いれずには麻美は即答した。麻美を見ると、拓弥と同じよつに面が震え、顔が青ざめている。

「もしかして麻美、まだ拓海に未練があるのかしら。」

涼子が嘲笑しながら言つ。

「違います！あのことはもう忘れました。それに、拓海は涼子さんのことのことを本気で愛してるってわかりましたから・・・。」

拓弥には何の事だか分からなかつたが、そう言つ麻美の表情はとても悲しげだった。

「とにかく

」

涼子は麻美の言葉などどうでもいいかのよつに拓弥を見た。拓弥の背筋に悪寒が走る。

「ここはあんたの仕事場なのよ。麻美が手伝おつかと言つても、断りなれ。」

そう言つと、一ヤリと不気味に微笑んだ。昨日の記憶がよみがえつてくる。

「知つてる？召使いが何かいけないことをしたときには、罰を下されるのが本当の優しさなのよ。」

嘘だ。この女に優しさなんて微塵のカケラもない。あるのは、暴力と人をいじめて楽しむ堕ちたココロだけだ。

涼子は、右足を大きく振り上げた。目標は拓弥の右手だった。

拓弥は恐ろしさで動けなかつた。涼子がもう一度ニヤリと微笑む。

そして、足が下ろされた。

「さやつ。」

麻美の短い悲鳴が聞こえる。

「涼子！――」

突然廊下の奥から呼び声がした。

廊下が静まり返る。

拓弥は、知らずに閉じていた両目を恐る恐る開けてみる。そこには、涼子の右足が拓弥の右手の数センチ上を漂つていた。

「涼子。」

もう一度奥から声がした。そして、奥から桃子が出てきた。

「大変なよ。拓海さんが仕事で事故にあつたらしいの。詳しくは知らないけど、すごく危険な状態らしいわ。これから大学病院に向うらしいから、私たちもすぐに行きましょう。拓弥さん、急いで支度を。部屋から拓海さんの衣類を持ってきてください。麻美もすぐに支度するから手伝つてちょうだい。」

「はい。」

麻美は短く返事をした。

涼子は、母が慌てる様子を見て、ゆっくり拓弥を見下ろした。

「これで済んだと思わないことね。」

涼子が言つ。そして、

「さやあ――。」

桃子のもとに急いで手伝いに行こうとした麻美が、悲鳴を聞いて振り返る。そこには、勝ち誇つた顔をし立つくす涼子と、苦痛の表情で右手を押さえこむ拓弥がいた。

「大丈夫！？」

慌てて麻美が拓弥に駆け寄る。右手を見ると、包帯から血がにじみ出でていた。

涼子はいつの間にかその場を立ち去つていた。麻美は急いで涼子の後を追う。

「待つてください。」

涼子は玄関で靴をはいていた。

「待つてください。どこに行くつもりなんですか？」

麻美が驚いて聞く。

「ちょっとそこまで。」

「そんな。早く病院に行く準備をしないと。」

麻美が慌てて言う。

「だって、あいつも一緒に来るんでしょう。あいつの顔を見るとイライラするのよ。いつもウジウジして暗くて。いつも暗くて暗くないそななのよ。」

「拓弥君は関係ないじゃないですか。それよりも、拓海が・・・拓海が一大事なんです。涼子さんがいかないと。拓海はきっと涼子さんに1番に駆けつけてきてほしいはずです。」

麻美の目から今にも涙がこぼれそうだ。それをみて涼子は諭すように言つ。

「悪いけど予定があるのよ。まーくんと久々のデートなんだ。だから、麻美が私の分まで看病しといてよ。そのかわり、私も麻美の分まで目一杯楽しんでくるから。・・・ね。じゃあ、あとはまかせた。頑張ってねえ。」

涼子は笑いながら外に出て行つた。

「なんでなの？信じられない・・・。」

ぼそりと呟いた麻美の目から涙がこぼれる。麻美は、あらん限りの憎しみで涼子がたつたままで出て行つた扉を睨みつけた。

病院に向うタクシーの中。桃子は補助席に座り、拓弥と麻美は後部座席に座っている。窓外では、ネオンが途切れることなく輝いている。

拓弥たちが大学病院について、廊下で待つているとすぐに外が騒がしくなった。そして、まもなく拓海が運ばれてきた。

「拓海。」

麻美が思わず声を上げて近づいた。

拓海は数人の看護師、そしてサングラスに黒いあごひげを生やした男に囲まれながら担架にのって運ばれてきた。見ると、脇腹のあたりが赤く染まっている。

「拓海。」

拓弥も麻美に続いて駆け寄った。

急いで手術室に向う拓海を乗せた担架を追いかけながら拓弥は思つた。

いやだ。

拓海の顔は青ざめている。

いやだよ。

看護師の人や麻美が必死に拓弥の名前を呼んでいる。

お願い一人にしないで。

夜中の病院に拓弥たちの足音が響く。

やめてよ。

拓海の脇腹が真っ赤に染まっている。

寂しいんだよ。

拓海はすぐに緊急手術室に入れられた。

お願い・・・生きて。

「ざんねんですが、手遅れです。」

嘘だ！

「なんで、何で死んじゃうの？」

嫌だ。

「えへ、死んじやつたの? まーへん、ビリコム。」  
認めたくない。

「拓海さんには、本物に可愛そつなことをしたわね。  
やめてくれ。」

「それじゃあ、新しい召使いを見つけてくれ。  
聞きたくない。」

「拓弥・・・やぶつなら。」

行かないで。拓海がいないとダメなんだ。」

「はつ」

拓弥はそこで目を覚ました。いつのまにか、眠っていたようだ。拓弥の顔や背中は汗でべトべトに濡れていた。目の前には、両手を合わせ祈るように目をつぶる麻美がいた。その横には桃子が心配そうにそわそわしている。拓弥の隣には、さつきのサングラスの男が腕を組んで、顔を下げている。もしかしたら、この非常事態に（僕と同じよう）寝てるのかもしれない。

不意に『手術中』のランプが消え、中からドラマでよく見る薄緑の手術白衣を着た医者が出てきた。

「先生、どうなんですか？」

慌てて桃子が駆け寄った。

「なんとか一命は取り留めました。ですが・・・」

医師はそこで言葉を飲んだ。そして、

「今夜が山場でしょう。」

306号室。手術室から移された拓海は、真っ白な部屋に眠りされた。右腕には点滴が繋がっている。

「麻美、拓弥さん、私たちは拓海さんの詳しい状況をお医者様に聞いてくるから、2人はここで待つてください。」

桃子はそう言い残し、サングラスの男（桃子が跡部と呼んでいた）あとべ

と部屋を後にした。

「とりあえず助かつてよかつたね。」

麻美がほっと胸をなでおろした。

拓弥は、黙つて拓海を見つめている。

「私、なんか冷たい飲み物かつて来るね。」

麻美はそう言うと静かに部屋をあとにした。

拓弥と拓海、部屋には2人だけになつた。

部屋の中は静かで、物音一つしない。

拓弥はさつきまで取り乱していたのが嘘のように、今はなぜか冷静だつた。拓弥の頭の中では、ついさつき見た夢が繰り返される。

×海が××	×と	なん	』
×海がい×	いと	なん	』
×海がいないと		なん	だ
拓海がいないと		なん	だ
拓海がいないとダメなんだ			

拓弥は、はつとした。

僕はさつき、なんて思つたんだ?

「拓弥がいないとダメなんだ。」

・・・誰かがいないと生きていけない?

拓弥の中のもう一人の自分が呻いた。

『それでいいの?』

そうだ。それは嫌なんだ。そういう人間にだけはなりたくないんだ。誰かがいないとダメ。誰かがいないと生きていけない・・・そんな弱い人間じゃダメなんだ。

『よせん人間は、一人でしか生きられない。』

人と関わつても傷つくだけ。人を愛せば愛するほど、信用すればするほど自分が生きるための障害になる。最愛の人気が亡くなつたら生きる気力がなくなつたり、親の弱さで一家心中の道連れにされたり、集団自殺をつのつてみたり、友人に裏切られたり、愛する人の身代

わりになつたり。

それじゃダメなんだ。しょせん人間は一人で、強くないと生きていけない。一瞬先は暗闇の戦国時代顔負けのこの世の中では、人を信用しちゃいけない。人と関わっちゃいけない。人間は根本的に一人なんだ。その他の人間は利用するんだ。僕の食料となる米や野菜や肉を作る。便利な携帯や車やテレビを開発する人・・・そういう人たちをうまく利用して生きていく。他人の変わりなんて、いくらでもいるんだ。所詮は一時の暇つぶし。こいつ（拓海）だつて、一時の寂しさを埋め合わせるために利用する。他人（拓海）の変わりは星屑ほどいるのだから。だけど

拓海がゆっくりと目を開けた。

「拓弥？」

ぼやける拓海の視界に写る拓弥の頬には、一筋の涙が伝っていた。

やつと分かつた気がする。

学校もクラスの奴らも先生も、みんないなくなればいいと思つた。僕は独りで生きていくから。だけど拓海は違つた。一瞬だけど、だけはつきり『恐い』って思つたんだ。拓海がいなくなるのを想像したらとても恐かつたんだ。やつと気づいた気がする。かわりはない、かけがえのない存在・・・それが『友達』なんだつて。それが本物の友達なんだつて。

それを、僕の人生で始めての友達に教わつたんだ。拓海のかわりなんていらない。例え拓海が星屑ほどいる人間の中の一人でも、僕と同じように拓海もたつた一人だけ、同じ星屑はひとつもないんだ。その場しのぎのインスタントの友達なんて、最初から存在なんかしない。だから

拓弥は目を閉じた。そして両手を合わせて心の中で強く願う。  
「だからお願い、目を覚まして。僕を一人にしないで！！！」

拓弥は叫んだ。涙が次々溢れてくる。

「大・・・丈夫だよ。誰も拓弥を独りにはさせないよ。」

拓海が小さな声で言つた。拓弥は、涙溢れる目をこすりながら拓海の顔を見つめる。

「拓海、やつとわかつたよ。

しょせん人間は、一人でしか生きられない。

だけど、一人では学べない。一人では成長できない。一人じゃ喜びや悲しみも感じられない。

てずつと思ってた。

だけど、拓海は違つた。もし拓海がいなくなるかも・・・そう思つたら恐かつたんだ。誰かがいなくなつたら、こんなにも恐いつて始めて気がついた。拓海の代わりなんてどこにもいなつてわかつたんだ。初めての友達に教わつたんだ。拓海・・・ありがとう。」

拓弥は拓海を見つめながら言つた。

そんな拓弥を抱き寄せて、拓海は震える声で言つ。

「俺も恐かつた。もし自分がこの世からいなくなつてたつて考えたら、すごく恐かつたんだ。」

「人のぬくもり。何年ぶりだらう・・・あつたかいよ。」

拓弥も震える声で言つ。

外では雨が完全に上がつてゐる。しかしその夜、拓弥は拓海を置いて逃げようとはしなかつた。

ねえ、拓弥・・・胸が張り裂けそなぐらじ苦しこよ。

拓弥は拓海に抱き締められながらそう思つた。

## 5【危険な罠と満月の夜・前編】

ガチャ・・・。

ドアノブを回す音がした。拓弥はドアに目を向ける。

ドアは開かれ、そこには拓海が立っていた。

「ただいま。」

拓海が照れくさそうに微笑んだ。

拓弥も、拓弥なりに精一杯口元を釣り上げ微笑んで見せる。

「おかえりなさい。」

その言葉と同時に拓海に抱きよる。

「寂しかったよ。」

拓弥が言う。

「俺もだよ。」

拓海が言う。

これからまたこの部屋で、2人の生活が始まる。

拓弥はこの妄想を何回繰り返しだらうか。

拓海が入院してはや1週間。拓弥はあの日以来病院に行くどころか、この家から出ることさえ許されなかつた。だけど、もうすぐ元気になつた拓海に会える。そう思うと自分まで元気にれた。太一郎の拷問にだつて耐えられた。

拓弥は一心にドアを見つめた。

コシン・・・コシン・・・。

遠くから廊下を歩く音が聞こえた。それはだんだんと、この部屋に近づいてくる。拓弥は生睡を飲んだ。

ガチャ。

ドアノブを回す音がした。拓弥はドアに目を向ける。ドアはゆっくり開かれ、そこには拓海が立っていた。

「ただいま。」

拓海が照れくさそうに微笑んだ。

拓弥も、拓弥なりに精一杯口元を釣り上げ微笑んで見せる。

「おかえりなさい。」

拓弥は喜びの声を上げ立ち上がつた。そして、拓海に駆け寄つてい

く。何回も何回も妄想した夢が現実になる瞬間・・・のはずが、なぜか拓海は両手で拓弥を制した。

「ごめん、まだ脇腹の痛みが消えてないんだ。喜んでくれるのは嬉しいけど、激しい歓迎はちょっと無理なんだ。」

拓海は申し訳なさそうに言つた。

そんな・・・。何回も何回も夢見てたのに。神様ひどいよ、・・・。・・・っと、心の中で思つた。

「全然平氣だよ。僕こそいきなり抱きつこうとしてごめんね。そうだよね・・・。あつ、ちゃんと拓海のベットをきれいにしといたから。今日はゆっくり休んでね。」

「おっ、気がきくね。ありがとう。」

拓海が笑顔で言つてくれた。久々にみた拓海の笑顔・・・。だけど、さつきのことが心に残り、あまり嬉しくなかつた・・・。つていうのはウソで、やつぱり久々にみた拓海の笑顔は僕に元気をくれる。だけど、やつぱり抱き締めてほしかつたな。

そんなことを思いながら、拓弥は自分のベッドの中に潜り込んだ。

#### 翌日の朝。

拓弥たちは、まず太一郎たちが朝食を食べるのを後ろで見守る。そして、太一郎たちが食べ終わつたあと、やつと召使い（拓弥、拓海、麻美、黒谷）が食事にありつける。食事は太一郎たちが食べ終わつたあとの大きいテーブルで4人揃つて食べる。だが、桃子の朝の支度がある麻美や、小食の黒谷はすぐに食べ終わつて部屋に戻つてしまつことが多い。だから、4人で会話なんてめつたにない。というか、拓弥がこの屋敷にきてから一度もない。

「食べにくそうだね。」

麻美と黒谷が食べ終わつて、2人きりになつた食卓で拓弥は言つた。

「まあな。でも、もうすぐ完治するから。」

拓海は、脇腹のほかにも右手や頭にも包帯をしている。脇腹ほど大

きな傷ではなく、本人いわくかすり傷だそうだ。

どうしてこんな怪我をしたのか・・・拓弥は聞きたくてたまらなかつた。でも、なんだか悪い気がして聞けなかつた。

「僕が食べさせてあげようか？」

拓弥が笑顔で言つ。拓海もつられて笑う。

「いいよ。赤ちゃんじやないんだしさ。」

「でも、早く食べないと。」

拓弥は壁に掛けてある大きな時計を指差した。

「拓弥は先に部屋に戻つて。あとから行くよ。この傷が治るまではこの屋敷の掃除を担当することになったから、いろいろ教えてくれよな。だから、先に行つていいよ。」

拓海が微笑みながら言つた。

「わかった。」

拓弥はなんとなく後ろ髪をひかれる思いで部屋を後にした。

いつもは一人でやる屋敷の掃除だが、今日は拓海と一緒にやつている。

拓弥は一生懸命床を拭く拓海を見つめていた。

拓海が雑巾を絞ろうと、バケツに手を入れようとする。

「待つて、僕がやるよ。」

拓弥はそう言つて、素早く拓海から雑巾を奪い取るとバケツの中に突っ込んだ。

「いいよ。それくらいできるから。」

拓海が言つ。

「ダメだよ。まだ完全に直つてないし。それに、拓海のためにいろいろしてあげたいんだ。僕たちつて『友達』なんでしょう。」

拓弥は絞つた雑巾を拓海に差し出した。拓海はその雑巾を見つめる。

「拓弥、あのさ・・・すごい言いにくいんだけど、言つね。朝もうなんだけど、あんまりいろいろしてくれなくていいよ。もちろんありがたいとは思つけど、でも自分で出来ることは自分でやるから。

ね？」

拓海が言つ。

「・・・うん、わかつた。」

拓弥は納得していなかつたが、聞き分けのいい子のフリをした。その様子を、廊下の影にかくれて涼子が不気味に覗き見をしていた。目がギラつき、口元がつりあがつている。

「なるほど、そういうことね。」

拓弥は一人部屋の中で考えていた。

なんで拓海は僕が抱きつくるを拒むんだらつ。もしかして、僕のことが嫌いなのかな？一週間前の、あの病室。あそこで感じた拓海のぬくもり。

拓弥は両手で自分の体をギュッと抱き締めた。もう一度、拓海に触れてみたい。

あの日の夜から、なぜか胸がモヤモヤする。拓海のことを考えると、胸が締め付けられて苦しい。この屋敷に来てから・・・いや、今までのなかでこんの初めてだ。

そんなことを考えていると、部屋をノックする音が聞こえた。

拓海だ！そう思い油断しきつた拓弥はドアを開けた。が、そこに立つている人物を見て拓弥の胃がギュッと締め付けられる。

「いま、大丈夫かしら？」

そこには、ヘビ女・・・もとい涼子が立つていた。

「な・・・なんの用ですか？」

拓弥は涼子と目を合わせないよつに自然とうつむいた。そんな拓弥をいつもの冷たい目で見下す。

「実はね、いいことを教えてあげようと思つて。」

そう言つて拓弥の肩に手を回した。拓弥の背筋に寒気が走る。涼子はクスッと笑つて、拓弥の胸に手を置く。そして、耳元まで顔を近づけ、甘い声でささやく。

「あなたの心の中でも、疼いてる感情。それは愛情よ。」「愛情？」

拓弥は思わず聞き返した。愛情・・・。

「そう、愛情。しかもそれは、友達や親友に対する愛情じゃなくて、恋人に対する愛情なの。その証拠に、あなたの胸は今、これまで経験したことのないくらいのドキドキ感を抱いてるはずよ。」「ドキドキ？僕が？拓海に愛情を？確かに拓海のことは好きだ。でもそれは、人間としてであつて。友達としてであつて・・・。」

「いい？あなたが拓海に求めてるのは、『友達』としての愛情なんかじゃない。『恋人』としての愛情なのよ。」「！？」

涼子の猫なで声に頭がクラクラする。そんな頭をフル回転して拓弥は考える。涼子は、拓弥から手をはなすと、天井を見上げて軽い口調で言った。

「だつてそうでしょ。あんたが拓海に何をしてほしいかは知らないけど、あんたの目を見れば一発でわかるわ。あんたは拓海に恋人としての愛情を求めてるの。友達じゃできないこと。恋人にならないと出来ないこと。それをあなたは求めてるんじゃないから。」「そう言うと、涼子は何も言わずに部屋を後にした。

一人になつた拓弥は考えをめぐらせた。

恋人？拓弥に恋人を求めてる？いや、違う・・・そんなはずはない。確かに、拓海は優しいし好きだ。だけどそれは人間的に好きって言う意味であつて、そういう好きではない・・・はず。そうだ！これはあいつの、ヘビ女の策略なんだ。きっと何か策がある。そうだ、そうに決まつてる。

ただ、きつさまで拓海の心にあつたモヤモヤした気持ちはすっかり消え去つていた。そして、数分後に帰つてきた拓海をまともに見れなくなつていた。

その日の夜。

拓弥はまだ寝付けないでいた。涼子の言葉が頭から離れない。さつきは消えていた心のモヤモヤが、また心の中に広がっていた。

拓弥は布団から起き上がった。横から拓海の寝息が聞こえる。たまに口から漏れる「うつ」「ん~」といつ言葉が色っぽい。まるで僕を誘っているみたいだ。

友達じゃできないこと。恋人にならないと出来ないこと。それをあなたは求めてるんじゃないかしら。

涼子の言葉がまたよみがえる。

「そんなことはない。友達同士だって、僕の求めてることは出来る！」

そう言つと、拓弥は一步一歩拓海の元に近寄つた。だんだんと田も暗闇に慣れてきて、拓海がはつきりと見えるよくなつた。長いまつげ、シヤツヤの唇・・・。もし学校に拓海が行つたらすぐモテるんだろうな。

拓弥は拓海の肩を軽くねすつた。

・・・反応はない。

今度は両手で揺すつてみた。

「うんん。」

拓海は寝返りを打つて拓弥の手をほどいた。

「拓海。拓海。」

「ん？」

拓弥の呼びかけに、拓海は目を開いた。細い目をこすりながら、焦点を合わせる。

「どうしたの、拓弥。つてうか、今何時？」

眠そうにあぐいをする拓海に、一瞬ちゅうきゅうするが、勇気を振り絞つて聞く。

「僕たちって、友達だよね？」

そういったのと同時に、拓海に抱きついた。

拓海は反射的に拓弥の体を押しのけた。拓弥は押しのけられ、拓海に抱き付きそびれた。

真夜中の静けさが襲いつ。

拓海は何が起こったかわからず、ただただ拓弥を見つめている。

「なんで？」

不意に拓弥が口を開いた。

「僕たちって『友達』でしょ？別に変なことをしたいわけじゃない。たださ、ちょっと抱き締めてくれるだけでいいの。よくテレビドラマもあるよね。男と男が友情を確かめ合って抱き締めあう。それとも、僕じゃイヤなの？」

拓弥の言葉に困惑する拓海。

「拓弥が嫌とかそういう言つ問題じゃなくて・・・。テレビドラマはテレビドラマで病室での時はすこく特別で、あれはあれでうれしかったよ。ただ、

ただ？拓弥は次の拓海の言葉を待つた。

「あんまり友達同時で抱き合つたりはしないもんだよ。

「そりなんだ・・・。」

拓弥の心に暗い影が落ちる。

「ごめんね。僕、友達っていなかつたから、そういうのよくわからなくて。嫌な思させちゃってゴメンね。」

拓弥のいつになくくらい表情を見て、拓海は苦笑いを浮かべて言つ。

「全然。大丈夫だよ。ただ、抱きつくとかそういうのは、拓弥が本当に好きな女の子ができるまでとつておいたほうがいいよ。」

僕が抱き締めたいのは拓海だよ。女の子なんかじゃない。

拓弥はゴメンね。ともう一回言つて、自分の布団の中に潜り込んだ。拓弥の心の中では、何かが燃え始めているのがわかつた。何か小さなもののがコラコラと燃えている。

拓弥はこのとき知らなかつた。小さな火種は、吹き消そとすればするほど、強く大きく燃え上ることを。そして、この炎はいすれ、

拓弥だけでなく拓海やこの屋敷の人々の運命まで燃やしつぶすこと  
を。

「それで、今日もよろしく頼むね。」

朝食の時間。拓海はあいかわらず食べにくそうに箸を持つてご飯を  
食べている。

「・・・・・」

拓弥は返事をせずに無言のままでいた。

拓海は昨日の夜のことに触れないよう、いつも変わらない態度  
をとろうと話しかけてくれている。でも、拓弥は昨日の話がしたか  
つた。昨日、僕に迫られてどう思ったのか。本心はどうだったのか。  
僕のことが嫌いになつたのか。そういうことが聞きたいたのに、拓海  
は気を使ってそのことに触れようとしない。本当はふれてほしい  
の。

拓弥はだんだんムカついてきた。

「・・・・昨日のことなんだけど。」

拓弥は思い切つて切り出してみることにした。

「昨日の夜のアレ」

「昨日はありがとうな。掃除の仕方とかいろいろ教えてくれて。  
いやー、勉強になつたよ。今日もよろしく頼むな。」

拓海は拓弥の言葉に割り込んだ。

「もいいいよ!」

その事にムツとした拓弥はそのままつと、食卓を後にして。

「なんだよ、拓海のやつ。僕がせつかく勇気を出して切り出したの  
に・・・・」

でも、どうしたらいいんだ。拓海のことを変に意識しちゃつて・・・

。拓海、拓海、拓海。

「教えてあげようか」

ふいに後ろから声がした。拓弥は恐る恐る後ろを振り返った。そこ

には、涼子が笑って立っていた。

「なにが・・・ですか？」

拓弥が言つ。涼子は一ヶコリ微笑むと、わわやくよひつな小さな声で言つ。

「知つてゐる？ 拓海はなぜかお金に異常なまでの執着があるの。今回の仕事だって、危ないってわかつてたのに給料がいいからやつたのよ。どうして拓海がそこまでお金にこだわるか。」

拓弥は驚いた。

「今回の仕事を知つていたんですか？ ジャあ、なんで止めてくれなかつたんですか？」

「私にはそんな権利ないもの。」

涼子はあつけらかんと言つと、話を続けた。

「それは、ある目的があるからなのよ。」

「目的？」

拓海は怪訝そうに聞き返した。

「そう、ある目的。」

涼子は意味ありげに含み笑いをした。そして続ける。

「拓海は私が中学校の時のこの家に来たわ。その時はまだ小学生だった。ちょうどその頃、年寄りの私の召使いが他界して、拓海は私の召使いとなつたの。拓海はこれまでの召使いやメイドの中で、一番に私に優しくしてくれた。だけどある日、聞いてしまつたの。パパがママと話してゐのを。拓海は、この家に売られたのよ。」

「売られた？」

「そう。いくらだと思つ？ 子供一人の値段つて、100万円よ。ちょうど私が中学校の入学祝に買つてもらつたダイヤモンドと同じ値段。拓海の家は貧乏だったらしいの。そう考えると、貧乏って言つのは恐ろしいことよね。あ～やだやだ。考えただけでぞつとする。だからね、拓海はその100万円を必死で集めてゐの。なぜだかわかる？」

「・・・。」

「そうよ、この屋敷から逃げ出すため。もし100万円集まつたらこの屋敷から解放してやる、そうパパが約束したの。だから拓海は健気にも、その約束を果たそうと頑張ってるの。」

「拓海が……」

そこで涼子は急に神妙な口調になつた。

「こままでいいの？ 拓海は怪我が治つたら、また仕事をやりだすわ。この屋敷から開放されるためにね。」

知つてゐる？ なんで拓海があんな大怪我したか。暴力団の幹部から極秘の書類を盗みだしたの。それを見つかつて銃で撃たれたの。今回はある程度の怪我で助かつたけど、次はどうかしらね。」

「そんな。」

「ねえ、拓弥。拓海を助けたいと思うならいつでも私に声を掛けてきなさい。私にいい案があるのよ。そして、拓海を助けられるのはあなただけなのよ……それを良く覚えといてね。」

そういうと涼子は、自分の部屋に戻つていった。

涼子の話を鵜呑みにしていいものなのか。にわかには信じがたい。しかし、拓海がお金に執着することは僕でもわかる。

拓弥は一人悩んでいた。

それから数時間後、一人で廊下の掃除をしていると、拓弥は後ろから声をかけられた。

30代くらいの女性で、こここの家に通うメイドの一人だ。

「奥様が、お庭の草むしりをしてほしいと申しておりました。できれば早いうちにということなので、よろしくお願ひします。」

そう言うとそそくさと戻つていった。

桃子が草むしりを？ なぜメイドを使って伝えさせたのだろう。それに、今まで脱走する恐れがあるとして屋敷の外・・・庭にも出してもらえなかつたのに。

拓弥は考えながらも、早くやつてほしいと伝えられたので、急いで

中庭に向かつた。

ついたはいいが、中庭はすでにきれいに整えられていた。それもそのままはずだ。ちょっと向こうの方に、ちゅうじの家専属の庭師が木の手入れをしている。

「このぶんじや、雑草なんて生えてないよな。」

そう呴きながら、一応雑草が生えてないかどうかチェックする。すると、どこからか微かに声が聞こえてきた。

「あっ。」

それは嘘うそに似ていた。拓弥は立ち止り、耳を済ませてみる。

「ダメです。まだ昼間ですよ。それに俺の体調も万全じゃないし。」

拓弥はドキッとした。この声、聞き覚えがある。

拓弥は声がする場所を探つた。すると、一部屋だけ昼間なのにカーテンが閉められている部屋があった。

拓弥は恐る恐る近づいてみた。確かに、中から何か聞こえる。不意にカーテンが少し開いていて隙間があることに気づいた。

拓弥はそこに顔を近づけた。中を見てはいけないのかもしれない……。だけど、この声はもしかして……。

「！」

拓弥は部屋の中を見て絶句した。

「ダメです、涼子さん。もうすぐ政志さんが来ます。」

「大丈夫。ちゃんと今田のデートは午後からにしてもらつたから。それに、拓海が1週間も入院してたから、ひつひつて抱き合ひの……。久しづりじゃない？」

「ああ！！！」

拓弥はカーテンの隙間から目を離せず、震える足で後ずさつた。嘘だ。拓海が。こんなのは……。

【グシャ】

突然拓弥の足元から音がした。空き缶を踏んでしまったのだ。拓弥は、ぐつと田をつぶり、そして走り去つた。

「今、音がしませんでした？」

拓海が息を切らせながら言つ。

「そう？ ジヤあ、見てきてあげる。」

そう言つて涼子は裸のままカーテンをほんの少しだけ開けて窓の外を見た。遠くに、拓弥が走り去る背中が見えた。それを見つめながら涼子は言つた。

「野良猫が誤まって空き缶を踏んだのね。大丈夫。誰にも見られてないわ。」

そう、かわいいかわいいドブネズミ以外にはね。

涼子は心の中で呟いた。そして、ゆっくり口元を釣り上げた。

拓海が部屋に戻ってきた時、拓弥の機嫌きげんは最悪だった。

「何怒つてんの？ もうすぐ」飯だよ。」

「つるせーーー僕にかまわないでよ。」

「なあ、どうしたんだよ。悩みがあるなら俺に相談してくれよ。」言えるわけがなかつた。

「とにかく、一人になりたいんだ。悪いけど、でてつてよ。」

拓弥は布団の中に閉じこもりながらそいつた。拓海は、心配そうに拓弥を見つめるが、やがて諦めたように部屋を出て行く。部屋を出て行くときに、拓海が言つた。

「それと、『食事の後に私の書斎に来なさい』って太一郎様が言つてたよ。」

太一郎と拓弥の間で、書斎で行われることは一つしかなかつた。終わりのない拷問。暴力。

「何をやつている！ たて！ 立つんだ拓弥。」

バシャ・・・と頭から水をかぶせられた。しかし、拓弥の頭には、

目には、昼間に見たあの光景が映し出される。涼子と拓海が抱き合っている姿。

拓海

拓弥は朦朧とする意識の中で自分の部屋に向つた。黒谷は、「もつとしゃあいとしなさい。」そしていつものように「このことは誰にも話してはなりません。もし話したら……。」と口止めされた。黒谷はいつも「もし話したら」の後を言わない。もし話したら、僕を殺すつもりなんだろうか。

部屋に着くと、付き添いの黒谷はきひすを返して帰っていった。外を見ると満月が美しく輝いている。

部屋に入ると、小さなスタンドの明かりがついていた。いつもは消して寝るのだが、拓弥の帰りを心配した拓海が付けておいてくれたのだろう。時計を見ると、12時を示していた。拓弥はスタンドの明かりを消すと、布団の中に入った。布団に入ると、急に殴られた箇所が痛み出した。それでも、5分後には夢の中に落ちた。

不意に目が覚めた。脇腹が痛い。

指弾は起き上がりで暗い。時計を見たら三時四十分を指している。夕はま

拓弥は何気なく拓海を見た。  
拓海の肌、脣、腕、目、髪の毛・・・今の拓弥には全てが愛おしかった。

不意に、拓海の金でかほしいといへる衝動に駆られた。

め  
た

一  
拓海

しばらくの間、そのまま動かなかつた。だが、拓弥は拓海の手を元に戻すと自分の布団の中に潜り込んだ。

「うつん。」

拓海の吐息が聞こえた。それを聞いた拓弥の胸が熱くなつっていく。同時に昼間の拓海の喘ぎ声が聞こえてくる。

・・・・・、拓弥は布団から飛び出ると、もう一度拓海の布団に歩み寄つた。今度はもつと慎重に。そして、拓海の体を両足でまたいで、中腰になつて拓海を見下ろした。

拓海は何も知らないで眠つている。拓弥は、なぜか拓海の首に目がいく。スースーと、寝息を立てるたびに、細い首が膨らんだり縮んだりする。

拓海はその首の周りを両手で囲んだ。もし、少しでも手に首が触れたら、絞め殺してしまいかもしれない。

満月の輝きが、窓から入り込み二人を照らす。

「許さないから。あのヘビ女と一緒になるなんて絶対に許さないから。僕には拓海さえいればそれでいいから。拓海も僕さえいればそれでいい・・・そうなつてよ。ヘビ女も太一郎も、桃子も黒谷も麻美も、みんな人形だ。僕と拓海以外、何も存在しないんだ。・・・待つててね。絶対に助け出してみせる。そしたら一緒に逃げ出そう。何もいらない。誰もいらない。2人だけの世界に行きたいよ。だから、もうちょっとの我慢だよ。」

拓弥は小さな小さな声で呟いた。そしてもう一度、今度は自分に言い聞かせるように言つた。

「・・・もうちょっとの我慢だよ。」

夜が明けると、「どこ行くんだよ?」という拓海の言葉を無視して涼子の部屋の前まで来た。まだ朝だつたが、このことを考えると仕事も手に付かない。それに本音を言つと、早く誰かに言つておかないと気持ちがかわつてしまふから。

【コンコン】

拓弥は涼子の部屋をノックした。

・・・応答はない。

拓弥はもう一度ノックをした。

・・・しかし、返事はない。仕方なく、自分の部屋に戻ろうとドアに背を向けたその時、いきなりドアが開き、手が伸びてきた。その手は拓弥をしつかり掴むと中へと引きずり込んだ。

「ちよつ。助けて・・・。」

そう発した拓弥の口を何かで塞がれた。そして次に突然視界が真つ暗になつた。

騙された！拓弥は思つた。

「助けて！助けて！」

押さえられた口を必死に動かして助けを呼ぶ。

不意に力が緩んで拓弥は床にしりもちをついた。

「何言つてるのよ。」

頭の上から涼子の声がした。涼子は、しりもちをつく拓弥を踏みするようにみて、よしつ。つと言つた。

「これならあんただつて誰にもわからないわ。マスクは・・・まあ、夏風邪をひいてるふりでもすれば何とかなるでしょう。」

マスク・・・？拓弥は口に手をやつた。いつの間にかマスクが口を塞いでいる。あの時口に押し当てられたのはマスクだったのか。更に言えば、視界が突然真つ暗になつたのも、黒いサングラスのせいだつた。

涼子は部屋の中央にある椅子に座ると、拓弥を見つめて言つ。

「ここに来たつてことは、覚悟が決まつたようね。」

拓弥は生唾を飲んだ。

「じゃあ、まず調べてきたんでしょうね。」

涼子が疑う目で拓弥を見た。拓弥は軽く頷くと

「全部で70万円あつた。」

と言つた。

涼子にはあらかじめこの仕事を受けるに当たつて条件を出されていた。それは拓海のお金の合計金額を調べることだった。昨日の夜、

あれから拓海のひきだしを空けてこつそり中身を数えた。ちょうど70万円あつた。涼子が予想していた金額の倍はあつた。拓弥は、そのお金を見ると拓海がどれだけ頑張つたか伝わってきた。そして、こんな紙切れのために拓海の命が危険に晒されたことを悲しく思つた。だけど、こんなただの紙切れでも、あと30枚集めれば拓海を自由にする最後の希望となる。だから、頑張ろうと決意した。

「そう、結構持つてたのね。じゃあ、まずは前払いの15万円。こういう所だけはちゃんと決意した。」

涼子は財布から15万円を取り出し乱雑にテーブルの上に放りなげた。

拓弥もあらかじめ一つの条件を出した。残りの金額の半分を先払いしてもらつ約束だ。涼子のことは信用できない・・・だからこれくらいはしないと。

拓弥は15枚の札束を見つめた。これで拓海は自由になる。拓海の役に立てる。役に立つて、拓海に必要とされたい。

そう思いながら15万円を取ろうとしたその時、涼子の目が光つた。素早く自分のポケットに手を入れて、そして光る何かを取り出した。

### 【ドス】

拓弥の手と札束の間に、尖つた果物ナイフ<sup>とが</sup>が突き刺さる。

前に涼子につけられた右手の傷が疼いた。拓弥はさつと手を戻した。「これを手にするとと言うことは、絶対に仕事をこなしてもらうことになるわ。知つてる? 召使いがご主人様との契約を破つたら・・・一生この屋敷の小部屋で幽閉されるのよ。もちろん頭のいい拓弥君は、そんなことはわかつてゐるわよね。」

涼子が微笑んで言つ。その手に持つたナイフが朝日を浴びて鈍く光る。

「あの・・・それってどんな仕事なんですか?」

「それは契約が成立してから。」

「何日くらいかかりますか?」

「さあ~ね。やってみないとわからないわ。」

「「」のこと、太一郎さんたちは知つてゐるんですか？」

「さあ？」

「本当に僕でも出来るんですか？」

「どうかしら？」

拓弥の質問を、軽い口調でいなしていく涼子。そして最後に拓弥の目を見て言つ。

「これはね、それはそれは危険な仕事なの。生半可な気持ちじゃ出来なわ。あんたみたいなウジウジ虫くんじゃ無理かもしれないわね。今のうちにやめてもいいのよ。そのかわり、拓海は一生この屋敷から離れられないわ。手となり足となり、私に一生仕えるの。さつき、僕にも出来るんですか？って質問したわよね。あんたは拓海に必要とされたい。拓海の役に立ちたい。・・・そうよね？そう思つてゐはずよ。だつたらやるしかないんじゃないの？知つてゐる？この世には愛する人を思う『愛情』ほど強い力はないのよ。もしあんたが本当に愛する人・・・拓海を助けようと思つならきっとできるはずよ。

涼子の言葉に拓弥の胸が熱くなる。

拓海が一生涼子の奴隸・・・そんなの嫌だ。

1分1秒でも早くこの屋敷から開放してあげたい。

拓海に必要とされたい・・・僕が拓海を必要としてるよつて、拓海にも僕を必要だと思ってほしいんだ。

拓弥は、机に置かれた15万円を力強く掴んだ。

その日の夜、部屋に戻ると拓海はもう寝ていた。今日もまた太一郎に痛めつけられた。今日は日曜日だつたから、一日中太一郎が家にいて、拓海とは顔を合わすことさえできなかつた。というよりも、意図的にさけていた。

拓弥がベッドに入ると、一枚の紙が布団の中からでてきた。拓弥はそれを訝しげに広げてみる。そこには、拓海の字が広がつていた。

・・・・・ポタ、ポタ。涙が紙を濡らした。

「やめてよ拓海。」

拓弥は拓海に近寄りながら言った。

「僕はずっと無視してたのに、なんでそんなに僕に優しくできるの？拓海がそんなに優しいから、好きになっちゃうんじやん。」

拓弥は静かに拓海のベッドの上に乗った。

「拓弥はまだ知らないんだよ。僕がどういう人間か。僕は拓海が思つてるほどキレイでも、いい子でもないよ。」

拓弥はそっと拓海の頬に手をやつた。

「僕は汚れてるんだ。どこに行つても受け入れられない異物なんだ。考えだつてねじまがつて。もう無理。直しようがないよ。それに比べて拓海は優しいよ。だつて、こんな僕に優しくしてくれたんだもん。だけど、僕と拓海じや釣り合はない。」

僕は同性に愛情を注いでこんなに愛しているのに、拓海はるか上、僕の手の届かないキレイな場所にいる。だからぐちやぐちやに汚したい。ぐちやぐちやに汚して、男同士の恋愛も正当化できるくらい汚して、汚して、そして僕の手の届く所まで来てほしい。

「拓海・・・。」

それは友情なんかじゃなく、まぎれもない愛情だった。

「大好きだよ。いま、気づいた。」

拓弥は拓海に気づかれないようそっと唇に口付けた。

まるで、これで僕たちは同類だ。これで拓海が手の届く所まで落ちて来た・・・と言わんばかりに。

終わりなき無限に広がる暗闇だけが、二人をそっと見つめている。

『拓弥へ

俺は鈍感だから、なにか拓弥の気に障ることをしたのかもしれない。もしかしたら、あの夜、俺が訳も聞かずに突き放したせいか

な。本当にごめんな。俺は拓弥のことを大切にしていきたい・・・  
そう思つてるんだ。だから、何か悩みがあつたらいつでも相談してくれ・・・つていつても俺じゃ頼りないかな（笑）  
拓弥がすごく優しいのは知つてるから、いろいろ抱え込まね。明日も早いし、また一緒に頑張ろうな！

拓弥の1番の親友 拓海より『

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7685d/>

---

暗闇の中の酸性雨

2010年10月11日18時05分発行